

花のような君

―イラン人の花の愛で方―

鈴木 均

ライラは煌々たる月、
その月に靡なき伏草のごとき
マジヌーン。

あちらは咲き誇るバラ、
こちらはバラに
ふり注ぐ白珠の涙。

ライラは秋を知らぬ
ジャスミン、マジヌーンは
秋色漂う草原^①。

イランの日常生活のなかで、お
呼ばれは重要な行事であり、生活
のなかのアクセントであり、いわ
ばイラン人にとっての最大の娯楽
である。われわれ外国人も数年間
イランで生活をしていると、必ず
何度かはお呼ばれのチャンスが
やってくる。多くの場合は親戚や
家族であるが、親しい友人同士の
集まりも多くの場合には「お呼ば
れ」のかたちを取る。

お呼ばれをするときには当然な

がら身ぎれいにして、女性ならば
入念にお化粧もし、その上からイ
スラームの規範にのっとった被り
物をしてタクシーか車でお出かけ
である。それに忘れてならないの
は手土産である。

問題は、この手土産に何を選ん
で持っていくかである。お菓子や
小物でもいいのだが、お呼ばれも
回数が増えるうちに似たような物
になってしまふ。またお菓子は持
参するお客さんが多い場合、むし
ろ主家の方で処理に困ってしまう
こともあるかも知れない。

そんな時には行きつけの花屋さ
んで気軽に花束や鉢植えを買い求
め、持っていくのがイラン流であ
る。日本だったらちよつと恥ずか
しくなるような大輪の花束でも、
イランならば恥ずかしがることは
ない。それにイランでは花の値段
が日本に比べて格段に安いので、

少しばかり気張って薔薇の花を多
めに入れても大丈夫である。

私自身もテヘラン滞在中には下
宿先の近くに馴染みの花屋さんが
二〜三軒あり、しばしば花束を
作ってもらったり、また時間のな
い時には出来あいのアレンジメン
トフラワーを買い求めていたもの
だ。そういえば日本に戻ってから
はそうした機会がほとんどない。
そこで今回はイランの花にまつわ
る話題を幾つか思いつくままに
綴ってみよう。

●薔薇とヒヤシンス

イランの国花といえは薔薇であ
る。ペルシャ語で最初に習う単語
のひとつは **roose** (花) であるが、
この **roose** は「花」という意味に加
えて「薔薇」のことも意味して
いる。つまりイランで花といえは
薔薇であり、薔薇は花のなかの花

なのである。

とはいえイランの花屋さんを覗
くと他にも様々な花が溢れてい
る。ニールーフアル(アサガオ)、
ナルゲス(スイセン)、ナスタラ
ン(野バラ)、シャガージェグ(ヒ
ナゲシ)、ソルボル(ヒヤシンス)、
コウキヤブ(ダリヤ)……そうい
えばイラン人の女性の名前には花
にちなんだ名前をつけることも少
なくない。

もしイランでお呼ばれやホーム
パーティーの席に遅れそうになり
花を持っていく時間もなかった場
合、例えばこんな会話が聞かれる
こともある。

「ご免なさい、服を選ぶのに手
間取ってしまったて花を買う時間も
なかったの」

「いいえ、あなたご自身が花の
ようですよ(シヨマー! ホデトウー
ン・ゴル・ハステイド)!」

もし外国人がこういう会話を悪
びれずに咄嗟に口に出せるように
なれば、その人のペルシャ語も相
当上級レベルに近づいたといえる
のかも知れない。

だが他方で最近ではテヘランの街
中をタクシーや車で移動している
と、季節により白いナルゲスを信
号待ちの車の窓越しに売ってくる



エスファハーンのナクシェ・ジャハーン広場にも花壇が造られ、人々が春のピクニックを楽しんでいた。噴水の向こうに見えるのは有名なエマーム・モスク。(撮影・鈴木均)

一〇代はじめの少女がいたりもする。ナルゲスの小さな花束はお呼ばれに持っていくには貧弱すぎるけれど、奥さんや愛娘へのちよつとしたお土産にはちょうど良い。それで最初のうちは一瞬の憐憫も手伝って代金を支払ってしまいが、こうした少年少女は地方から出てきたばかりの親のひも付きで、さらにその背後にはこうした商売を手広く行っている元締めグループが控えているに違いない。

今年の春、イランに出張した際に久しぶりでエスファハーンを訪

ねた。イランを初めて訪れる知人との二人旅だったこともあり、二年ぶりにアツバースイー・ホテルに泊まったのだが、サファヴィー朝期の建設になるキャラバンサライを改装したこの高名なホテルも欧米による厳しい経済制裁下のイランでは宿泊する外国人客もまばらで、よく手入れされた花が咲き誇る中庭を散策していると、現在のイランが置かれた状況をいやでも思い起こさざるを得なかった。だがそれにしても、イラン人は何と花の好きな国民だろうか。高級ホテルの中庭ばかりでなく春の観光シーズンたけなわのエスファハーンは町の内外いたる処、経済制裁などどこ吹く風といわんばかりにむせる様な花々の香りが満ち溢れていた。

●殉教の花チューリップ

だがこうした花とは別に、革命後のイランにおいて一貫してイスラームの宗教的な意味がまつわっている花もある。それはラーレ(チューリップ)である。特に一九八〇〜八八年のイラン・イラク戦争時には、紅いチューリップは殉教のシンボルとして盛んに用いられた。現在でもイランの地方都

市を車で訪れると、どの町の入り口でもそれぞれの町から出た殉教者(戦死者)がポスターや看板に描かれて我々を出迎えてくれる。こうした殉教者の肖像画で必ず一緒に描かれるモチーフがチューリップなのである。なぜこれがチューリップなのかについては、東京外国語大学名誉教授の上岡弘二氏が周到に解説されているが⁽²⁾、実はそこにも書かれていないもうひとつの理由があることに最近気がついた。

それはいわばペルシャ語の文字遊びのような話である。ペルシャ語のラーレはアラビア文字で「ラーム・アレフ・ラーム・ヘー」の四文字からなる。これの最初の二文字を交換すると、「アレフ・ラーム・ラーム・ヘー」すなわち「アッラー(神)」となる。

つまり「ラーレ(チューリップ)」はイスラームの教えの中心にある「唯一絶対の神」に通じるという訳である!

だがこれは実はペルシャ語の世界でのみ通用する話であり、チューリップはアラビア語では「フザーマー」という全く別の単語である。そしてそこに「アラビア語しか解さぬアラブ人にはこの

意味分かるまい」というイラン人のいささか屈折した自尊心を読み取ることも不可能ではない。考えてみれば「ラーレ」が殉教者のシンボルとして盛んに使われたのは、アラブ人国家であるサウジアラビア・フセイン体制下のイラクとの戦争時においてであった。

ともあれ最も深刻たるべき殉教者のシンボルをめぐってさえもついに秘かな遊びの要素を入れてしまふイラン人の遊び好きの心性は、彼らのもはや半ば業のような「火遊び好き」にまで通じており、現在進行中の核交渉においてもそれは時にしつかりと発揮されているように思われる。筆者としてはそれが万が一にも無俚(むろ)の国民を巻き込んだ「死の遊戯」とならぬことを祈るのみである。

(すずき ひとし/アジア経済研究所 地域研究センター)

《注》

(1)ニザーミー・ガンジャヴィー『ライラとマジヌーン』(岡田恵美子訳)より。

(2)上岡弘二編『暮らしがわかるアジア読本—イラン』(河出書房新社)。